

平成28年度第2回鹿児島市総合教育会議 議事録

□開催年月日 平成29年1月26日(木) 13時15分開会
14時15分閉会

□開催の場所 鹿児島市役所 本館2階特別会議室

□出席者

市長	森 博幸
教育長	杉元 羊一
教育委員	津曲 貞利
教育委員	高島 まり子
教育委員	桃木野 聡
教育委員	立元 千帆
(関係者)	
合同会社 Go! Kagoshima 代表	門田 晶子
同社マーケティング担当	エイリー麻弥
(関係職員)	
企画財政局長	秋野 博臣
企画部長	鉦之原 誠
市長室参事(国際交流課長)	宮之原 賢
教委事務局参事(管理部長)	星野 泰啓
教育部長	藤田 芳昭
学校教育課長	谷口 幸一郎
少年自然の家所長	永吉 眞一
(事務局)	
企画部参事(政策企画課長)	池田 哲也
政策企画課主幹	室田 久敏
政策企画課主任	迫 孝之
教委・総務課長	橋口 訓彦
教委・総務課主幹	土屋 幹雄
教委・総務課主査	久家 加奈子

□次第

1. 開会
2. 議題
本市におけるグローバル人材の育成について
3. 閉会

□会議要旨

1. 開会

(政策企画課主幹)

ただいまから、平成28年度第2回鹿児島市総合教育会議を開会いたします。
会の進行を本会議の招集者であります森市長にお願いいたします。

2. 議題

本市におけるグローバル人材の育成について

(森市長)

それでは、私の方で議事の進行を行います。

本日は、28年度、第2回目の総合教育会議となります。

今回は「本市におけるグローバル人材の育成について」という議題を設定いたしました。これは、昨年度の総合教育会議で、「これからは地域に根ざした国際人が必要となる」という意見をいただいたことがきっかけでございます。

地方創生においては、若者の人口流出が課題となっておりますが、一度、鹿児島を出て、グローバルに活躍をした後、また戻ってきて起業または就職される方々もおられます。また、鹿児島の世界的にビジネスを展開していく企業で働くにあたっては、異文化を学ぶことが必要になってくると思います。

今後、そういった「地域に根ざした国際人」を育成することは、本市の発展・活力の維持につながるものと考え、この議題を設定いたしました。

なお、本日は、合同会社Go! Kagoshimaの門田晶子代表に、特別にご参加いただいております。後程、ご意見を伺いますので、よろしくお願いいたします。

まずは、「本市におけるグローバル人材の育成」に関する鹿児島市の取組について、資料に基づいて、国際交流課と教育委員会からの説明をお願いします。

(国際交流課長)

それでは、お手元の資料1に基づいて、国際交流課の取組をご説明いたします。

資料の左側でございますが、本市では青少年海外派遣事業として、「青少年の翼事業」を実施しております。

目的は、本市の青少年が外国の歴史及び文化に触れ、外国での生活を体験することによって、国際的視野を拡大し、外国との親善を深めるとともに、本市の国際化の推進に寄与する人材育成を図るもので、平成2年度から実施しております。

28年度は、本市の姉妹友好都市であるナポリ市、パース市、マイアミ市、長沙市のほか、アジアへの派遣としてマラッカ市・デポック市へ、本市の中学・高校・大学生等をそれぞれの地域に8名ずつ派遣しております。

これまでの派遣実績は、27年度までで905名となっており、毎年度、報告書を作成し、学校等へ配布するとともに、パネル展を市役所等で行っております。

このほか、当課における青少年の海外派遣事業といたしまして、28年度は、県青少年国際協力体験事業による中学・高校生をラオスに、友好都市の長沙市で開催された国際サッカー大会に小学生を、また、27年度には、薩摩藩英国留学生派遣150周年を記念して、県や関係市とともに中学・高校・大学生をイギリスに派遣しております。

次に、右側をご覧ください。

本市では、アジア各国と本市の青少年が一堂に集い、音楽を中心とする芸術を通して、青少年の国際性を育み、郷土への誇りと熱い志を持つ青少年の育成を図るとともに、市民の国際交流意識の高揚を図るため、平成18年度から、アジア青少年芸術祭を開催しております。28年度は、10月15日、16日に8つの国と地域から9団体の参加のもと、青少年芸術祭などを開催いたしました。開催にあたっては、中学・高校・大学等に通う青少年を中心としたボランティアスタッフ94名が、企画・準備・当日の運営に参加しております。

このほか一番下にございますように、市民主体の幅広い国際交流活動を促進するため、平成26年に鹿児島市国際交流財団を設立し、その運営に対して負担金を支出しております。財団における、人材育成に関する事業としては、新入在住外国人の歓迎交流会や多言語による絵本の読み聞かせ教室、国際協力体験イベントなどを実施しております。

以上でございます。

(学校教育課長)

資料2をご覧ください。国際理解教育の推進について、ご説明します。

施策の概要でございます。グローバル化する社会で自分と異なる環境社会で生きる人の生き方や考え方を理解するとともに、お互いが認め合い、尊重しながら生きていく力を育てること、また、外国語だけでなく、各教科等を通じて、相手の意見を聞き、自分の意見を述べることなどのできるコミュニケーション能力の育成を図ることを目的としております。

具体的な取組として、1番目に中学生の英語スキット・スピーチコンテストを開催しております。2番目に中学校・高等学校へALT21人、小学校へAEA、小学校英会話活動協力員40人を派遣しております。3番目に英語教員への英検、TOEIC、TOEFL等の資格取得の奨励、4番目に小学校英語研修の充実に取り組んでおります。

このような施策の背景には、グローバル化する我が国において、世界と向き合って共存していくことが不可欠であり、そのような中、子どもたちに自国や他国の言語・文化を理解し、日本人としての美德や良さを生かしたグローバルな視野で活躍するために、必要な資質や能力の育成が求められていることによるものでございます。

以上でございます。

(少年自然の家所長)

かごしま創志塾の実施状況について、ご説明申し上げます。

資料2の右側をご覧ください。

少年自然の家では中・高校生24名を定員として、長期宿泊共同生活の中で国内外で活躍する講師陣との出会い、ALT・留学生との異文化交流、英会話講座、郷土鹿児島県の歴史・文化に関する学習等、実践的に学ぶプログラムにより、郷土に愛着と誇りを持ち、グローバルな視点で次世代を切り拓き、社会をリードする心身ともにたくましい人材を育成することを目的として、平成27年度より、かごしま創志塾を開設しているところでございます。

グローバル人材の育成という点につきましては、郷土への愛着と誇り、伝統や文化、歴史への深い理解を土台として、異なる文化や習慣、価値観を受け入れたり、自分の意見を正々堂々と述べたりすることができる能力や態度を養う必要があるという観点から、各種プログラムを編成したところでございます。

具体的な取組につきましては、お配りした資料に写真と内容をまとめたところでございますが、7泊8日の第1ステージ、1泊2日の第2ステージの中で、それぞれの活動を展開したところでございます。

以上でございます。

(森市長)

ありがとうございました。ただいま、鹿児島市の取組について国際交流課、学校教育課、少年自然の家から紹介がありました。

それでは続けて、門田さんのご紹介を事務局からお願いします。

(政策企画課長)

それでは、門田様のご紹介をさせていただきます。

門田様は、鹿児島市のご出身で、高校1年生の時に渡米され、大学、そしてテレビ局勤務など、通算21年、アメリカで暮らされた後、鹿児島市に戻られ、刷上印刷に入社、平成22年からは同社の代表取締役社長も務められました。

昨年9月に、鹿児島で初めてのグローバルビジネスコミュニケーション事業を手掛ける合同会社Go! Kagoshimaを立ち上げられ、同社の代表を務めていらっしゃいます。

(森市長)

それでは、門田さんから、ご自身の経験等も踏まえ、青少年のグローバル人材の育成について、ご意見を伺いたいと思います。よろしく申し上げます。

(門田代表)

やや緊張しておりますが、よろしくお願いいたします。

私見として、思っていることを述べさせていただきたいと思います。

まず、グローバル人材育成が鹿児島市に必要ということで、この議題となっていると思いますが、鹿児島市にとってグローバル人材育成とは何かという再確認が必要だと私は感じています。生徒、つまり教育される側にとって、世界のグローバル化という前提を実感できるようになっているか、世界情勢が自分ごととなっているのかということを確認することができているでしょうか。

生徒が考えるようなこととしては、今食べている肉はどこのものか。ニュージーランド産であれば、何故ニュージーランド産なのか。今着ている服はどこで作られているのか。何故ピコ太郎は世界で人気になったのか。そういうことを考えるときに、若い世代が世界と自分との関係性をどのように捉えているのか、考える場面があるのか。

鹿児島市にとって、グローバル人材の育成のメリットは何か、そして教育を受ける側に響いているのか、それを考える機会にさせていただければと思います。

私が個人的に世界とつながった感じがした最初の体験としては、母の妹がアメリカ人と結婚していて、親戚がアメリカ人であったことから、身近に感じるようになりました。そこで、私の家庭とアメリカ人の親戚の家庭との違いを見て、あちらの方が良いなと思って、アメリカに行きたいという気持ちが幼稚園生、小学生くらいの時から芽生えて、そこから英語を勉強しなくちゃと考え始めました。

その後、英語をもっと自分のしっかりした力にするために取り組んだのが、先輩に紹介されたペンパルでした。ペンパルクラブに加入して、送られてくる名簿を見て、自分で選んでドイツのこういうことが趣味の人とペンパルになりませんかという、今でいうとFacebookみたいな仕組みに参加して、最高で30人くらいの世界中の人たちと英語やフランス語などを使って、手紙のやり取りをしたという体験をしました。そうすると新聞を読んでも国際欄が自分ごとになってきます。ペンパルが住んでいる、イランのテヘランで戦争が起こっているのに、何故この人は私に平和な手紙を書いてくるんだろうとか、いろんな疑問が出て来て、そういうふうに、自分と世界がつながっていく経験を私はすることができました。

若い頃は自分の個人的な友人関係だったり、趣味の世界でつながるということができると思いますが、大人になるとビジネスでのつながりができるチャンスが出てくると思います。そうしたときに、グローバル人材育成がどう生かされるかという、鹿児島で世界を近く感じる人がどんどん世界を股にかけてビジネスをすることで、鹿児島の活性化にも生かされてくるのではないかと思います。私たちも実際にそれをやりたくて、新しい会社を立ち上げた経緯があります。

鹿児島市で取り組んでいらっしゃる既存プログラムについての意見を述べさせていただ

きますと、まずかごしま創志塾については、非常に素晴らしいプログラムだと思っています。私は、創志塾という名前が決まる前のアイデアの段階から関わらせていただきました。さらに、第一回の第一講座を受け持たせていただいて、生徒たちがドキドキ緊張しながら参加するアイスブレイクをしたり、グローバル化とコミュニケーション能力についての話をみんなに考えてもらって、意見交換をしてもらいました。私も小さい頃にそういうものがあつたら、参加したかったと感じるくらい、素晴らしいプログラムだと思います。志の高い生徒たちが、自分でやりたいと集まってくるので、非常に選び抜かれた生徒たちが、お互いにつながるネットワークを作れる機会ともなりますし、今後期待しているのは、志の高い、目的意識のある、結構な割合でグローバルな仕事を将来はやりたいという生徒がたくさん集まってきた創志塾でしたので、そういう生徒たちの拠り所としてのコミュニティが今後、創志塾で形成されれば良いなと期待しています。創志塾とは、世界に羽ばたいていく生徒への登竜門という認識が鹿児島市で広がって欲しいと考えています。

ところで、私たちのGo! Kagoshimaはアメリカ人が2人、私も含めて日本人が2人の4人のチームですが、去年の9月に設立したタイミングの理由の一つは、鹿児島市でALTとしてお世話になった、今日もオブザーブで来てもらっているエイリー・麻弥が、プログラム上5年までしか滞在できず、鹿児島がとても大好きになって、残って仕事をするには、どういうやり方があるのだろうと考えて、私も彼女の働きぶりなどを創志塾を通して見たりしていたので、このような人材が鹿児島に残りたいと考えているのに、アメリカに戻すのはもったいないと思ひまして、ちょっと早めに起業して、彼女が働ける場所を作るという意味もありました。

教育委員会は、ALTのプログラムを通して、鹿児島のファンを作っていらっしゃると私は認識しています。ALTの方とお話しする機会があつて、いろいろご意見を聞いています。これは麻弥が言ったことではないですが、ALTはせつかく日本に来て、生の英語を日本の生徒に教えたいたい気持ちがある一方、なかなか教室の中で、それが実践できていないというフラストレーションを感じていらっしゃるように思います。外国人の先生がいるからいいでしょうと、そこで止まっている印象を受ける部分もあります。せつかくネイティブの方と生徒との触れ合いをもたらず機会を作っていらっしゃるので、文化の違いや多様性について生徒たちが学ぶ機会を、ALTを活用することでもう少しできないかなと思っています。

私の意地悪な仮説としては、英語を教える日本の先生たちの英語があんまりできていないというか、苦手意識がまだまだあるのではないかと思います。言っちゃったという感じですが、先生方が自信を持って教えられないのに、ALTが一生懸命やってもうまくいっていないような気がします。

あと、英語アレルギー患者を大量生産しているような印象を持ってしまひて、私にとっては英語は自分を自由にしてくれるツールとなったのですが、英語を学ぶことによって、こんな可能性もあんな可能性も見えるという、これを嫌なものとして若い人たちが嫌うと

というのがすごく残念に思います。

ここまでが私の意見でしたが、このお時間を借りて、私から提案させていただきたいと思います。

A L Tや地域に住んでいる外国人の人たち、姉妹都市のマイアミ、パース、長沙などとのよいつながりをもっと活用することを推進します。いろんな外国語をしゃべるネイティブの方が鹿児島に住んでいらっしゃるの、外国語のコミュニティを形成することを教育委員会でも市長事務部局でも支援していいのかなと思います。

また、英語を中心に、外国語は使ってこそですので、使う機会を作るという意味では、例えばアジア青少年芸術祭は素晴らしいイベントだと思っていますが、何百人もアジアから青少年がやって来るのに、ホテルに宿泊してしまっています。ホストファミリーを募るのはすごくハードルが高いと承知していますが、少しでもグローバル人材を育成するため、家族ごとグローバル体験をするという教育的な意識を持ち、鹿児島市の若い家庭にホストファミリーになってもらう努力をすることによって、世界を身近に感じる青少年を鹿児島市でも育成することができるのではないかと考えています。ただ、宴会やイベントだけの付き合いだけでなく、「住まわす」体験をするということは、非常に深いグローバル社会との結びつきの目覚めになるのではないかと考えています。

さらに、グローバルの定義について、鹿児島市で共通認識があっても良いと思います。日本ではグローバルという言葉が一人歩きをしているように思うのですが、世界に通用する鹿児島のグローバル人材を育成する大事さというか、その先には何があるのかというのを皆で描いたものを見ることができたらいいと思っています。

最後の提案ですが、私の会社でも「7つの習慣」という本を取り入れて、英語版と日本語版のどちらも使いながら、コミュニケーションや会社の経営についての考え方を一致させるために、皆で勉強しているのですが、その中で、特に「パラダイムシフト」という考え方が書かれています。パラダイムシフトがまさに私の思うグローバル人材なのかなと思います。自分の常識が世界の非常識であるということを理解することが、国際理解の教育の根底にあるのではないかと思います。そこで、パラダイムシフトができる、相手は何が常識と考えているかが分かる人格形成ができる教育がグローバル人材育成なのかなと思っています。自分のことを肯定できないと、相手のことをいくら理解しようとしても認めることができないと思います。パラダイムという感覚を、多様な相手に対して柔軟にできる人材育成を鹿児島市でできたらいいなと思います。

まとめに入りますと、中国やインドなど人口で言えば、ボリュームゾーンはいろいろあると思いますが、やはりビジネスやコミュニケーションにおける世界の共通語は英語だと思います。英語を自由に使うことができると、自立や自由をつかむことができると思います。鹿児島は世界に通用するものをたくさん持っていますが、それは日本中どこでも言えることで、鹿児島だけが良いものを持っているわけではありません。どれだけ自分たちの意思で、鹿児島の人たちが世界を舞台にしようとして行動していくかで違いが出てくると思

います。グローバル人材というのは、どこにいても、自分たちがやりたいことを成し遂げるための意思と実践力を持つ人材であると思います。試験や受験のための英語を変えて、使える英語コミュニケーションを目標とした英語教育、国際教育をしていただきたいと思っています。

英語を使うことで、コンピュータープログラミングや医療・介護、スポーツ、エンターテイメントなど、様々な分野で活躍する鹿児島の人材が今後たくさん増えていくことを願っております。

文部科学省に振り回されるのではなく、鹿児島市独自のものを形成していただいて、まずは教育者の方々が出る杭になって、お手本を示していただければ、鹿児島メソッドのグローバル教育というものができてくるのではないかと思います。

言いたい放題で失礼いたしました。これで私の話を終わらせていただきます。ご清聴ありがとうございました。

(森市長)

門田さん、貴重なご意見を大変熱心にお話しいただき、ありがとうございました。

それでは、これから門田さんも交えて、意見交換に入りたいと思います。

まずは、教育委員の方々から、市の取組や門田さんのお話を聞いて、何かご意見やご質問、ご提言があれば、お出しいただきたいと思っています。

(高島委員)

門田さんにお話を聞かせていただきましてありがとうございました。

市の取組について数点質問なのですが、国際交流課の青少年の翼事業は、平成2年から長く続いており、素晴らしい経験を約1,000名がしてきているという心強い報告でしたが、この体験を帰国した後、どのように子どもたちが発信していくのかを知りたいところです。報告書を学校などに配布とおっしゃったような気がするのですが、もう少し具体的に、めったにない経験を本人たちが生かしていく、あるいは自分の周囲に波及させていくことがなされているのか、お尋ねしたいです。

(国際交流課長)

先程ご説明いたしましたとおり、報告書という形で各訪問団一人ひとりが作成し、まとめたものを各学校等に配布して活用をお願いしているところです。また、参加された子どもたちは、帰国後に報告会をした上で、パネルを作っていただき、市役所や中央駅のサービスステーションなどに展示して、活動報告を市民に見ていただけるように取り組んでいるところです。

また、青少年の翼の参加条件としまして、国際交流財団の会員になっていただいております、財団のいろんな事業やアジア青少年芸術祭にも参加やご協力いただき、そのような形でフ

ードバックしているところでございます。

(高島委員)

本人たちの生の声でのプレゼンの機会というのは設けられていますか。

(国際交流課長)

帰国後に市長に対して、合同で帰国報告会をしていただいています。また、直接の報告ではありませんが、全員でパネルを作成しています。薩摩藩英国留学生150周年では、式典の中で、各自が報告した例はありますが、青少年の翼では、報告書という形でまとめて報告させていただいております。

(高島委員)

今後、いろいろ検討されていくとは思いますが、せつかくの事業ですし、人数的にも平成2年度から積み重ねがあります。各学校に任されているかもしれませんが、個人的な要望としては、帰ってきたときに自分たちの同年代の児童生徒に対して、生き生きとした報告を何らかの形で、プレゼンの機会を作っていただけると、個人的な体験がより生かされ、広がっていくのではないかと思います。

続けて申し訳ありませんが、同じく国際交流財団の事業の具体的な説明をお聞かせいただければと思います。

(国際交流課長)

新入在住外国人の歓迎交流会は、春と秋の年2回、留学生等の外国人の方を歓迎し、交流するイベントとして、春のハーティパーティーを4月に行い、昨年度は227名の参加者のうち、留学生70名が参加して交流を図っております。

絵本の読み聞かせ教室は、年3回ほど、幼児や小学生低学年と保護者を対象に、外国語の絵本を最初日本語で少し説明した後、それぞれの国の言葉を使って、読み聞かせをするものです。1回目は14家族30名程の参加があったと聞いております。場所は市民福祉プラザです。

国際協力体験イベントは、「開発途上国の現状と私たちにできること」というテーマでJICAデスクにも協力をいただきながら、子どもたちに、グローバル化が引き起こす様々な問題を貿易ゲームを通じて把握したり、開発途上国で生きる子どもたちの水や教育など現状を勉強したりした上で、私の国際協力はどのようなことができるかをワークショップ形式で学ぶものです。事前申込制にて、かごしま県民交流センターで実施しています。

(高島委員)

教育委員会の中学校・高等学校へALT21名、小学校AEA40名を派遣というのは、

これは兼任している人がいらっしゃいますか。

(学校教育課長)

兼任はしておりません。ALTは最大5年間のプログラムとなります。

(高島委員)

小学校英語研修の充実については、門田さんのご意見にもあったように、英語教育に関連する問題点がいろいろあると常々感じておりますが、具体的にどのような研修なのか、教えてください。

(学校教育課長)

小学校は平成32年から小学5・6年生で週2時間の教科化、小学3・4年生で週1時間の外国語活動が始まりますので、これに対応するために、平成28年度は国に英語教員が研修に行っており、この教員が29年度から14時間の研修を実施します。各学校代表の教員1名ずつに集まっていただいて、還元研修を行い、それを踏まえて各学校でそれぞれが英語研修を行う予定です。

現在は、夏休みに半日かけて、小学校の英語教員に研修を行っており、前回は文部科学省の教科調査官をお呼びして、小学校英語の進め方というテーマで研修を行ったところです。

(高島委員)

夏休みの半日研修は、小学校の先生全員が出席されるのでしょうか。

(学校教育課長)

各学校から1名ずつとなります。

(高島委員)

国への研修も各学校から1名ということでしょうか。

(学校教育課長)

市から1名が国へ研修に行き、その後に伝達講習という形で来年度から各学校代表の教員1名に対して14時間実施するということになります。

(森市長)

他に何かご質問やご意見はありませんか。

(桃木野委員)

私は2年間アメリカに行っておりましたが、門田代表がおっしゃるように、鹿児島には英語アレルギーがある人が多いのではないかと考えております。私は「Hi！」と言われると固まってしまう状況です。

30歳になってから外国に行くと、スムーズに向こうの文化になじめないと思いますので、小さいうちから英語に触れる機会が大事だと思います。それと、英語を勉強として捉えるとアレルギーになるので、門田代表がおっしゃられたように、英語を学ぶことでこんなことができるようになるということを、その先に何があるか、英語というのはツールであること、適当な英語でもいいじゃないですか、ということをつかんだ上での英語教育を進めた方が良くと思います。

質問なのですが、国際交流課に、青少年の翼に参加された方がどれくらい鹿児島に定着されて、グローバル人材として派遣されたことが、どういう形で鹿児島市にフィードバックされているのかということをお聞かせいただいた上で、今度は、門田代表にお尋ねしたいのですが、海外に行くことは大事だと思いますし、違いが分かるからこそ、ビジネスチャンスが見つかるのだと思います。これからは、固定観念にとらわれないよう、外に出て行っている学んで欲しいと思いますが、行きっ放しになっては意味がないわけで、大学を卒業して東京に出て帰って来ないということと同じになってしまいます。門田代表としては、出て行った人材がどうしたら鹿児島に戻って来てくれるのかを教えていただきたいと思います。

(森市長)

まず、国際交流課から、これまでの905名の方々の何名が鹿児島に在住されているのか、こういった形で国際交流されているのか、統計を取っていますか。

(国際交流課長)

申し訳ありませんが、派遣した905名については、その後、県外に就職した等のフォローはしておらず、把握していないところです。

(森市長)

例えば、青少年の翼で海外に行った経験がきっかけで、その後アジア青少年芸術祭や鹿児島市の国際交流の事業に参加して下さったり、ホストファミリーになりたいとか、鹿児島の国際交流に力を注いだり、生かしたいと申し出るような方はいらっしゃいますか。

(国際交流課長)

我々の考えているスキームとしましては、海外派遣の経験をした方には国際交流財団の活動やアジア青少年芸術祭の受入の協力など、現場でフィールドワークのような形で生か

してもらっています。

また、昨年度で言いますと、40名弱の枠に200名くらいの応募がありますので、応募する方にもそのような波及効果があると思っております。

(森市長)

次の質問は、門田代表に出て行った方が帰って来るきっかけはどのようなものがあるかということですが。

(桃木野委員)

門田代表はどのようにしてアメリカに21年間在住されて、幼稚園の頃からアメリカが好きだったはずなのに、何故鹿児島に戻って来られたのか、差し障りない範囲でお聞かせいただければと思います。

(門田代表)

私の場合は、戻って来るつもりはありませんでした。グリーンカードも持っていて、永住権があるので、ずっと向こうの人になるつもりで暮らしていたのですが、私の家業の後継者がいないと父から言われて、「帰って来い」ではなく「帰って来てやらないか」という話が面白そうだったのと、自分も新しい人生のチャレンジの機会をもらったということに対してやってみようというチャレンジ精神で戻って来たところです。

何故私が戻る気がなかったというのは、鹿児島の居場所というものを全く感じておらず、私も出る杭だったので、出てしまっただけ良かったという感じで、すごく窮屈なんですね。鹿児島だけじゃないと思います。日本のどこがより窮屈じゃないか、住みやすいかは分かりませんが、若い世代が勉強するのは受験のためで、受験して大学に進学していいところに就職するというレールに乗せられるのがすごく嫌で、枠にはめられたくないという思いが、小さいころから非常に強かったです。そういうところに住むよりも、自分で自分の道を切り拓いて、上手くいってもいなくても自分の責任として生きていけるアメリカという場所を選んで、そこが非常に自分にも合っていたので鹿児島に戻って来る気はなかったです。

そういう人がいっぱいいて、鹿児島がどうあれば、戻ってきたいと思うかを考えた時に、私のように県外に出た人が暮らしやすい状況を作ることかと思います。ユニークなことがメリットになるような環境を作ることが大事で、そういう人がビジネス社会の中で、社会に貢献できる一員として、楽しく自分の持っているものを生かしながら活躍できる鹿児島市であれば、アメリカも良かったけれど、鹿児島も面白そうだから帰って来ようかなという人材がいっぱい出てくると思います。

ひとつは、私たちの設立したばかりの会社も今年は潰れないようにするのが目標ですが、今後、もしうまく発展することができたら、多様性のある人材を採用していきたいと思っておりますし、そういう採用の輪がいろんな会社に波及されて、ユニークな人がいること

がいいことだという鹿児島市になっていけば、外に出た人も面白いことを比較してみて、やっぱり鹿児島はいい部分があるから戻って来ようとなるのではないか、出っ放しには必ずしもならないのではないかと思います。今のままだと、出っ放しの方が楽しいし、いいように見えるのではと感じられます。

(森市長)

ありがとうございました。津曲委員は何かありませんか。

(津曲委員)

グローバル社会になっていると言われ、事実そうですが、グローバル社会になったときに、鹿児島が埋没してしまうことは避けなければならないことだと思います。例えば、日本で国際都市はどこかといったときに、東京よりも世界的には京都だろうと思っていて、むしろ日本的なテイストがしっかりと残っているところが国際都市であると思いますし、実際に観光客も多いですが、それよりも、おそらく国際都市と言われる京都は、日本の文化と外国の文化の比較研究がしっかりとされているという土台があるからだと思います。グローバル社会におけるグローバル人材というのは、むしろ、鹿児島なら鹿児島のアイデンティティをしっかりと持つ人材を育成することだと感じております。

昔は、地域と国際は反対語であったような気がしますが、今は一緒の言葉になっていると思います。問題は国際から地域になるのか、地域から国際になるのかということだと思いますが、国際を強めすぎて、英語なら英語だけと思えば、地域は埋没してしまいます。国際的なものさしの中で、地域を見るのではなくて、地域から国際という視点が大事だと思います。鹿児島の文化とかいうものを、まずは一番最初に学ぶべきだろうと思います。

かごしま創志塾は国際と地域のバランスが非常によくとれていて、門田代表が評価されているのもその点だと思いますが、私もそのように感じています。英語は重要で、何故重要かという世界がグローバル化しているからではなくて、鹿児島をグローバル化しなければならないために英語が必要だとなります。そこには必ずベースに鹿児島があるわけです。これからも鹿児島のどこが強みかということが大事で、何が言いたいかという、英語は演繹じゃないと思います。理論や文法があって英語が始まるのではなく、伝えたいものがあって、英語がツールとして乗っかってくるということです。

今日は学校訪問で、城南小学校のAEAの授業を見学させていただきました。一番にぎやかだったのは、英語のクラスで、何故にぎやかだったかという、英語でビンゴをやっていたからでした。ビンゴで勝ちたいという目的のために英語を使っていたということです。よく練られているなと思いましたし、これからの小学校における英語導入の仕方の参考になりました。

それよりも学校教育課長がAEAに対等に英語でしゃべっているのを聞いて、驚きました。素晴らしかったです。こんな人がいるんだと感銘を受けました。

話が脱線しましたが、小学校の教員全員が英語を学ぶのは無理だと思いますので、ALTや上手な人を使って、こんなにしゃべれたらいいのになと小学校の教員が自分で勉強し始めるのが望ましいと思いました。

これからの鹿児島においてのグローバル化の前提に、地域の歴史や文化の研究をベースに置いて欲しいと思います。ただし、これから違うのは、それを英語で訳すというようなことを取り入れるべきだと思います。

ここで質問なのですが、青少年の翼事業で派遣される学生は、向こうで英語で鹿児島の魅力などを発表するようなプログラムがあるのでしょうか。私は、5分間の自分のスピーチを、鹿児島がいかにか素晴らしいかということを書いて、自分で抑揚をつけて読むことが非常に勉強になると考えているタイプなので、青少年を行かせて英語を学ばせるのであれば、「This is a pen.」「Jerry meets Tom.」とかではなくて、「Saigo Takamori is very famous person.」とか鹿児島の要素を入れたりして説明したりするといいなと思いますし、それなら小学生でも取り組めると思います。

(国際交流課長)

訪問する子どもたちは、現地で学校交流をしておりますので、出発前に2・3回集まってもらい、打合せをした上で、向こうで英語や日本語を交えながら、例えばおはら節を踊ったりしながら、鹿児島のPRを行っております。

(森市長)

立元委員は何かありませんか。

(立元委員)

私自身は門田代表とは対照的なところにいる人間で、大学は県外に出ましたが、鹿児島に戻ることを疑わず、ずっと戻りたいという気持ちがありました。逆に今回このような議題で、どういう気持ちで出て行くのか、どうやったら戻って来るのかを考えた時に、その理由を何人かの同級生に聞いてみましたら、自分にあつた職がないという答えが返ってくるが多かったです。それは都市の規模や職種の多様性の違いがあるかもしれませんが、解決策や答えも私にはないのですが、今回の議題でこれまで自分が疑問に思わなかったことを考えさせられました。

また、私は受験のための英語しか勉強してこなかったのですが、確かに社会人になって、何故私は1年でもいいから海外に行って、実践として使えるような英語を勉強しなかったのだろうと考えました。その必要性などを本気で教えてくれる大人がいればよかったですなと感じました。

(森市長)

それぞれ委員の方からご質問やご意見をいただきました。

小中学生の若い年代から外国語に親しむ、自分のものにしていくというお話がありました。次期学習指導要領で小学5・6年生は英語が正式教科、小学3・4年生は外国語活動が導入されるわけですが、教育委員会はそれを見据えて、どのように対応する予定でしょうか。

(杉元教育長)

現在は、小学5・6年生で外国語活動を実施しています。それが小学3・4年生に下りていきます。そして5・6年生は英語として教科化されて、小学校における英語の比重が大きく増すこととなります。これも将来の子どもたちがグローバル社会で活躍するということを前提にしながら、国で定められた学習指導要領となっていくと思います。既に外国語活動が小学校に導入された段階、あるいは中高においても、高大接続の部分についてもTOEIC、TOEFLの評価を大学入試でも生かすというような動きが既に大きく始まっている中で、教職員の指導力は大きくクローズアップされており、子どももまず英語の教員が自信を持ってチャレンジするためにも研修の機会を持てる環境に腐心しております。

どうしても義務教育・公教育ということで、最小限こままでを身に付けさせなければならないという部分では大きな課題もありますし、さらに教育委員会でも、国際交流課でも、国際交流財団でもしている子どもたちのリーダー性、国際性を育てるようないろいろな事業を、特に教育委員会としましては、かごしま創志塾について、まだ2期生ですが、その卒業生をいろんな場面で活用することが必要だと考えております。実は、創志塾の参加者が学校に帰ってどれだけ活用されているかは個人的にも、高島委員もおっしゃられたように、送り出す側、受け取る学校というものがしっかりと人材の活用、子どもたちであってもキャリアを持った子たちをどう活用するのかということの意識を強く持たせることがなければ、個々のキャリアとしてしか蓄積していかず、これは本意ではないところでありますので、今後とも国際交流課の事業などについては、私どもなりに先生方、管理職を含めてその必要性を再認識したいと考えております。また、グローバル化というのは、津曲委員がおっしゃったように、郷土教育と非常にコミットしておりますし、ましてや明治維新150周年においては、鹿児島の方々はまさしく国際理解を増すような経験、西郷さんの場合は、海外には行っていないものの、当時の奄美での異文化経験を通して十分理解を深められた方であろうと思っております。子どもたちがいろんな活動に参加する過程でも、参加した者同士、あるいは参加した者と参加していない者をいかにシャッフルしながら、触媒化していくかということが、事業における人材の活用としては、今後重要になっていくだろうと思います。

そして最初に申し上げた通り、公教育としての英語あるいは外国語活動に求められているものをしっかりとボトムアップしていくということを学校教育課等を中心に進めていき

たいと思います。

(森市長)

ありがとうございました。まだまだあと1～2時間この会議を続けたいところですが、時間も迫ってまいりました。

皆さんから大変貴重な意見をいただきました。門田代表からは、鹿児島市の国際交流に向けた取組についても大きな示唆をいただきましたし、それぞれの教育委員の方々にもいろんなご意見をいただき、感謝申し上げたいと思います。

皆さんからいただいたご意見・ご提言は、国際交流課、国際交流財団と連携しながら、どういう形になるか分かりませんが検討し、また教育委員会においても検討いただければと思います。

門田代表には、わざわざお時間を割いてお越しいただき、心から感謝を申し上げます。

以後の進行を事務局に返します。

3. 閉会

(政策企画課主幹)

長時間に渡り、ご協議ありがとうございました。

以上をもちまして、平成28年度第2回鹿児島市総合教育会議を閉会いたします。

【以上】